

# 身体表現の指導法

－ 振り返りノートの記述から －

米倉 慶子

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(平成 29 年 11 月 2 日受理)

Keiko YONEKURA

( *Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyushu University Junior Collage* )

キーワード：表現力・動きの基礎・コミュニケーション・ノート

## 1. はじめに

保育者養成校の学生は、感性と表現の領域を学ぶが、学校教育法第23条五の「音楽、身体による表現、造形に親しむことを通じて、豊かな感性と表現力の芽生えを培う」ことや、領域「表現」に「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」と掲げられおり、保育者はこの内容を指導する必要がある。しかし、一般的に学生は人前で表現することに羞恥心を持ち、自己を表現する意欲を持たないことが要因となり、自分の感情や体験を自分なりに表現することに難色を示す学生が多く見受けられる。<sup>1)</sup>つまり、子どもへの指導法を学ぶ前に、表現する者としての態度に関する課題を抱えているのが現状である。

『表現』に関わる科目として「保育内容（リズム表現）の理論と方法」（本学では1年次前期）があり、身体表現の基礎指導を中心に展開しているまた、2年次の前期には「保育内容（表現）の理論と方法」があり、美術担当教員と、筆者の二人で『表現』に関する科目を展開している。

さらに、教職課程には関わらないが本学の幼児保育学科表現・音楽コース必修科目として、2年次生を対象とした「幼児ダンス」を科目に置き、表現の応用的な内容（身体表現）を指導している。

「保育内容（リズム表現）理論と方法」は、1年次前期の科目のため、入学後間もなく大学の授業に慣れていないことも関係し、専門科目がどのような学修につながっているのか理解しにくい場面もあるようである。さらに人前で身体表現を披露しなければならない授業内容のため、最初は戸惑いながら授業に参加する学生が多いのが課題である。その課題を解決し、身体表現における保育者としての基礎を培う中で、自らが豊かな表現が出来るよう取り組む必要がある

## 2. 目的

本実践報告では、15週の授業の中で身体表現学の基礎や、学生の自己表現力向上及び子どもに身体表現を楽しく伝え、表現力豊かな子どもの指導ができるよう授業してきた指導法を振り返り、平成31年度より新教職課程がスタートすることに伴い、シラバスや指導法の一助とすることを目的とする。

## 3. 方法

対象者は、西九州大学短期大学部幼児保育学科1年生96名である。平成28年度前期、15週の講義内容を1週

目、2週目から5週目、6週目から15週目に分け指導を振り返る。特に、1週目については学生の抱く授業への印象がその後の意欲に影響するため、学生の様子から振り返る。また2週目から15週目までは、学生の感想、ノートの記述を分析した上で態度等の観察も指標として指導法を振り返ることとした。

## 4. 指導内容と実際

### 1) 1週目の指導内容

学生が授業への興味を持つか持たないかは1週目で決まると言っても過言ではない。受講生が本科目が保育者に必要な専門科目であることを意識するために保育現場の実際を説明することを授業目標としている。その他の身体表現の意義はここでは取り上げていない。

(1) シラバスの説明の後に、幼稚園教育要領の「表現」のねらいの説明と、卒業までに自分の感性を磨く努力をすることを伝えた。この時点では、まだ学生は自分の感性を高めることがどれだけ子どもに還元できるかイメージできない状況であった。

(2) 4月から3月までの1年間の保育現場の身体表現行事や、月ごとの歌を学生が考え、取り上げ、クラス全員で歌うようにした。4月の行事に関して行事名はすぐに分かるが、季節の花の歌については担当者のアドバイスを必要とした。5月のこどもの日の行事で、「こいのぼり」を歌いながら、拍子感を体験させるために拍手と床を叩く拍子感の動きを取り入れたが、このあたりから笑い声や笑顔の学生が増え、幼い時の記憶が目覚め始めたように感じた。その後、徐々に行事名を答え、歌の題名を答える学生が若干増えてきた。12月、1月、2月、3月の行事の歌である「真っ赤なお鼻のトナカイさん」「お正月」「うれしいひな祭り」「1年生になったら」は、担当者が歌うことにより題名等を思い出していたが、自発的に題名を思い出すことはなかった。

(3) 授業の最後に次週の予告としてじゃんけん遊びの「お茶らか」を導入した。クラスの半数以上は出来ていたが、初めて体験したという学生も3組いた。しかし、学生通して教え合い、縦の列の二人組、左右の学生との二人組と相手を入れ替えて経験することにより、クラス全員で取り組むことができるじゃんけん遊びが可能となった。最終的にクラス全体が笑いに包まれ和やかな雰囲気となり、活動に対する理解が進んだ。

### 2) 2週目から5週目の指導内容

この期間は、コミュニケーションを主体に、ひとり一人が心解放して活動に取り組むことを意図して指導内容を考慮した。じゃんけん遊びの発展、簡単なパントマイ

ム、コミュニケーションダンスや、小道具を用いたダンスから羞恥心を克服することや、協力して作り上げる喜びを体感させる指導も併せて実施した。さらに教科書を併用しながら動きの基礎を楽しく体得することを視点に授業への興味をつなげることにした。

- (1) じゃんけん遊びの発展では、活動にスピード感という軸を加えることで、活動にメリハリが出ると同時に楽しさが加わり、学生の心が開き、さらに新しい手遊びを加えたことでクラス中が和んでいた。学生自身が笑顔に満ち溢れていたため、この体験したことをそのまま子どもに指導することにより、子どもは表現に興味を持ち、自然に豊かな表現へとつながることを指導した。また、手遊びの効用と現場での実際の手遊びの使い方や指導の仕方を体験させた。
- (2) パントマイムにおいては、「甘いお菓子」「梅干しが酸っぱい」「バナナを食べる」動作を二人組で確認したが、自分が考えて表現することに羞恥心を持ち、取り組もうとする学生が少なかった。
- (3) コミュニケーションを目的としたクラス全体で取り組むダンスにおいては、子ども向けのゲーム性のあるフォークダンスを教材に用いた。指定された動きができない学生が続出したが、特にミス指摘せず、自由に表現することを伝えることで、学生は安心し、間違っただとしても互いに笑顔を忘れず和やかな雰囲気になるよう配慮した。さらに、この教材に動物の模倣表現を取り入れたことで、動物の模倣に羞恥心を覚えながらも、動物になりきった他の学生の姿に感化され、小さい動きだが自らも動き始めた学生が数多く見られた。子どもへの指導については、未満児や3、4、5歳児に適する指導法を説明した。
- (4) 二人で取り組むダンスでは小道具としてポンポンを用いた。まず自由に色鮮やかなポンポンを使用した。次に小道具を用いる効果を説明し、身体表現における環境のあり方を指導した。実際の体験では高度な技術を駆使してポンポンを操っていた学生もいたが、大半の学生が童心に返り、ポンポンを楽しんでいた。またこの段階では発達段階の説明を取らず、5歳児向けの16拍のポンポンの動きを二人で創作するよう指示した。5歳児の動きという指示に頭を悩ませていた学生が数多くいた。
- (5) 教科書を併用した動きの基礎部分では、子どもの動きが想像できない学生が多いため、手と足の動きをそれぞれ掲載している教科書を用いて、動きの解説と図解で読み解く方法を取り入れた。クラスを5グループに分け、それぞれのグループで動きを検討し子どもの「手」と「足」の動きの獲得を目的として進めた。イメージしていた子どもの動きより簡単な動きだったため、グループで協力して教科書を読み解き、振りつけ

を完成させていた。

### 3) 6週目から10週目の指導内容

この期間は主に教科書の読み解きと、子どもが発達的に可能となる隊形変化の指導を中心に、言葉かけを交えた実践も行った。さらに、他のグループの発表を観ることによる動きの獲得を目的として、実技試験の各グループの評価、自分のグループの評価を記述させた。また、子どもたちの好感度が高い教材を用い、その中で発達段階に合わせた子どもの動きを指導して、個人差の配慮の重要性を説明し、主体的に取り組む11週目から15週目に繋げるようにした。

- (1) 子どもに好感度が高い教材に掲載している教科書の振付を読み解き、その教材の間奏12拍、8拍、8拍の創作と隊形変化及び、最後のポーズを自由に決め、グループ発表に臨むよう指示した。次に子どもの発達段階を教示なしで創作し、その後、発達段階を考慮した創作の変更を指示した。5グループの内、指定した子どもの年齢に合わない動きを取り入れているグループが各クラス共に2~3グループあった。発達段階を説明した後は、発達年齢に合った振付が取り入れられていた。

この週は実技試験も経験して発表にも慣れた頃で、他のグループの発表を観察することで様々な創作を観察学習することで、動きや隊形移動などの獲得を目指した。短い拍数ではあったが、学生は隊形移動まで考えることに苦慮していた。

### 4) 11週目から15週目の指導内容

最終的なまとめとなる期間である。学生に対して興味や楽しさを感じさせるということよりも、保育者として保育現場の行事である運動会、生活発表会（お遊戯会）、誕生会における身体表現を意識させ、現場体験感を味わうことのできる指導内容とした。また、この半年間の授業の感想をノートに記述し、14週目に提出するよう指示した。

- (1) 運動会、生活発表会向けの教材を指導の集大成として取り組ませ、幼児が好む教材曲に小道具を持った1曲通した創作を指示した。20数人体制の振付には困難を極めていたが、グループの学生全員の意見が反映する方法を考え発表するよう指導した。多くの学生は集団をリードして意欲的に、かつ主体的に取り組んでいたが、20%ほどの学生は指示されるままに動いている様子が窺えた。
- (2) 誕生会に保育者として、戦隊ものの教材曲を子どもに披露することを目的に、5人組から6人組のグループ編成をした。歌詞の部分は筆者振付によるが前奏48拍、間奏72拍、後奏24拍の創作を指示した。こ



れに付随して保育現場での身体表現環境の重要性を再度説明し、常に保育室に変身衣装、お面、小道具を用意することで子どもの表現の意欲につながることを指導した。最後に、戦隊もののアニメーション曲の小道具として、安全で取れにくいお面作成の指示をした。この教材は子どもに見せることを前提としたため、子どもが憧れるような創作を考えることがキーポイントであることを意識させた。学生にとって72拍の創作は困難を極めアイデアが浮かばず、話し合いが中心になり実際の振付に取り組むまでに時間を要した。

- (3) 指定の教科書兼ノートは、2週目より毎回提出することとしている。ノートの内容は学習したことを図解入りで記述し、動きや指導の際のポイントなどを書き込み、本日の気づきや感想の書き込みができるようになっていく。はじめの2～3週間はノートの書き込み方がわからず2、3行のみの記述となっている学生もいたが、先輩のノートの書き込みを提示してからは、記述するB5のスペースに用紙を継ぎ足して2枚に記述する学生も多くいた。毎回全員提出であるが、毎週1グループを対象に順に修正・コメントを記述してフィードバックした。

## 5. 振り返りの結果

1週目については、シラバスの説明及び幼稚園教育要領「表現」のねらいや内容説明から振り返ると、保育者として関わる行事の実態や実際に用いられているじゃんけん遊びをしたことで保育者のイメージ作りの一端になったようである。「これぐらいは知っているだろう」と推測される行事について、こちらの考えとは異なり、これまで体験していない（知識としてない）学生が多く、もっと勉強しなければという意欲の芽生えが感想に記述されていた。そのため、1週目の取り組みについては、継続して授業を進めていく必要性を感じた。しかし、幼稚園教育要領の説明については全く反応を示さなかった。これは入学して最初の授業という不安の中で、幼稚園教育要領というものの説明が不十分な中で説明となったために、理解することが困難だったことが推測される。1週目の指導の中に多くの情報が含まれていたことが原因であろう。そのため、今後、教育要領等の法令や制度の説明には配慮が必要である。

一方で、1週目の授業終了後の感想を分類すると以下の3点となり、授業に対する期待は大きいことが分かった。

- ① 楽しい授業だったため、これからが楽しみ
- ② 知らない歌が多かったため、これから一生懸命学びたい
- ③ 人前に立つことに慣れていないため、これから慣れ

て積極的になれる力をつけたい。

最も多く記述されていた①については、授業内容に楽しさを感じ、次からの授業を期待する文面であった。②については、行事名や季節の歌を答えることが出来なかったが、保育者にとっては避けて通れないことであり積極的に学んでいくことの必要性が記述されていた。③は少数ではあるが、表現することや発表することに不安を覚えているようで、クラスが楽しく盛り上がっている中、自分がその中に入っていけるか心配する記述であった。しかし、最後にはそれを克服したいとの決意も同時に記述されていた。最初の授業感想は、学生の姿を反映しており、不安感を抱く学生には声をかけ意欲を持たせる関わりができるため、今後もスクリーニングとして続けていく必要がある。

2週目から5週目に関しては、学生が興味を持ったじゃんけん遊びを導入として取り入れたことにより、学生の気持ちがリラックスしたようである。その上でコミュニケーションダンスを取り入れたことにより、互いの名前を覚えるなど、クラス全員及びグループ間に一体感が生まれた。その日の振り返りノートの記述に、「ペアが変わっていろいろな友達と仲良くなれる」ことを記述していた学生が多いことから推測される。また、小道具を使うことで羞恥心が薄れ、初めての実技テストにも関わらず、半数以上が過度に緊張することなく発表できていた。さらに、教科書掲載の「手」「足」の動きを体験したことにより、幼児の動きは緻密ではなく単純な動きでよいことを知ったようである。上述した項目は今後も取り入れていくが、パントマイムはまだ表現することに自信がない上に、相手に見せるということが羞恥心につながっていると考えられたため、今後指導法に含むかどうか検討する余地がある。

6週目から10週目については、教科書掲載の振付を読み解きと短い拍数の振付及び発達段階を意識した振付では、グループの協力や主体的な隊形変化の取り組みを、楽しみながら各グループが実践していた。これも今後取り入れていく項目である。協力体制が出来上がったところで、学習した振付を子どもにわかりやすく伝える方法や、発達段階とともに指導したことについて、ノートの感想に大半の学生が「グループ全員で協力することが大事である」ことを記述していた。今後も取り組んでいきたい。

11週目から15週目については、半期の集大成である1曲通した創作及び、拍数の多い前奏、間奏、後奏の創作で、保育者として子どもの前で踊ることを想定して指導した。学生は今までにない長い創作に苦慮し、協力できない学生がいることの悩みを記述したノートが多かった。クラスを2つに分けた発表であるために、リーダーシップをとる学生や、それについていく学生の二つに分

かれた。限られた時間の中で発表をしなければならないため、全員が協力し取り組むにはどうしたらよいかを話し合った結果、それぞれに役割があることを理解して、何とか発表に間に合ったような状況だった。今後、1曲を通した振付については教材としての妥当性について検討しなければならない課題の一つであろう。

14週目に退出されたノートには、「楽しく授業に取り組めた」「それぞれのグループが他のグループよりも印象的な振付を考えている」といった意見が多く、互いの役割や活動を認めるといった内容が多く、協調性という観点から見た場合、保育者としての成長につながった印象がある。

杉浦ら(2015)<sup>2)</sup>が指摘するように多くの経験を積み、自信をつけることが重要であるが、本授業でも段階的なグループ編成などを行ってきたように、指導者(幼稚園教諭)として声掛けや導入方法については、学生の性格や経験などを考慮して心理学的なアプローチも必要と思われる。そのためにも、動きが主体の科目ではあるが、振り返りを詳細に分析することにより、毎回の講義内容や教材について考察することができたといえる。

## 6. まとめ

学生自らが興味を持ち楽しさを感じることで、子どもたちに「表現の楽しさ」を伝えることに繋がるという思いで実践指導を行ってきた。半年間で幼児教育の現場を想定した実践的な授業を展開することに躊躇したが、結果として保育者としての意識づけにつながったと考察する。今後の教育課程の改正を目前に検討する課題も明らかになった。今後は授業の到達目標等もさらに見直して、自信をもって子どもに指導ができる保育者を養成したい。

## 参考文献

- 1) 島田 左一郎「学習者の羞恥心を軽減する“リズムダンス”導入法」(2012)文化学園長野専門学校研究紀要4, 3-17
- 2) 杉浦宏季・橋 和代・横谷智久・野口雄慶「身体表現活動における羞恥心の要因の検討に有効な質問項目の選択」(2015)福井工業大学研究紀要45, 264-267